

第 9 回川崎市史市制 100 周年記念版編集懇談会 会議録（摘録）

- 1 日 時 令和 8 年 4 月 23 日（木）午後 7 時～午後 8 時半
- 2 場 所 川崎市総合自治会館 大会議室 2
- 3 出席者
 - (1) 委員 阿久津委員、大城委員、大島委員、落合委員、嶋田委員、鈴木（ひ）委員、鈴木（勇）委員（オンライン参加）、反町委員、高田委員、竹内委員、中村委員、にしにし家委員、福森委員、望月委員
 - (2) 事務局 総務企画局コンプライアンス推進・行政情報管理部：吉永部長
総務企画局公文書館：柿木館長、堀切担当係長
TOPPAN 株式会社：浅井、鶴岡、吉村、中村
株式会社トップノック：片岡
市史だよりライター：早川
株式会社アーク・コミュニケーションズ：渡部、佐藤
- 4 次 第
 - (1) 開会／趣旨説明
 - (2) 議題の説明
 - (3) 紙面見本について意見交換
 - (4) 進捗報告／今年度のワークショップに係る説明
 - (5) 総括／次回案内
- 5 公開・非公開の別 公開
- 6 傍聴者 なし

（次第一） 開会／趣旨説明

事務局（堀切）

本日は、お足元の悪い中お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。第 9 回を迎えました編集懇談会ですが、令和 8 年度を迎えまして、今年度で事業が完了する見通しでございます。併せて年度初めの懇談会ということで人事異動がございまして、今回、コンプライアンス推進行政情報管理部長と公文書館長は異動となりました。

たので、ご紹介させていただきます。コンプライアンス推進・行政情報管理部長の吉永でございます。

吉永部長

4月からコンプライアンス推進・行政情報管理部長を拝命しました、吉永と申します。3月までは教育委員会の教育環境整備推進室で学校施設の維持管理や増築などに携わっており、3年間ほどおりました。

今回、畑違いのところに来たところですが、私自身は、川崎市で生まれて育ち50年以上が経ちました。市制100周年のうちの50年以上がここに携わって、川崎市にお世話になっているところでございます。ですから、異動となりご縁があって、こうやって100周年の市史編纂に携われることは大変光栄に思っております。

今回のコンセプトとしては、市民の皆さまに手に取ってもらい楽しいと感じてもらえるようなものを作りたいということです。今年度中の完成に向けて、皆さまのさまざまなご意見を伺いながら、協力しながら楽しいものを作っていければと思っておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

事務局（堀切）

続きまして、公文書館長の柿木でございます。

柿木館長

皆さま、こんばんは。コンプライアンス推進・行政情報管理部公文書館の館長として、4月から着任いたしました柿木と申します。よろしくお願いいたします。

前の所属は同じ総務企画局の庁舎管理課で、主に市役所の庁舎の管理等に携わっておりました。令和5年に川崎市の新しい本庁舎が完成し、その移転や整備に実際に携わるセクションとして、この2～3年は非常に忙しくさせていただいておりました。

実は堀切も、公文書館に異動する前は本庁舎等整備推進室という部署にありまして、私どもの「庁舎を管理するセクション」と「本庁舎を作るセクション」ということで、お互いに色々と協力しながら、一緒に本庁舎の整備を進めてきました。また巡り巡って別の職場でまた一緒になれたのは、何かの縁かなと感じております。堀切が一昨年度から皆さまと進めている新しい市史の編さんに、私も携わることができ、非常に光栄に思っております。

いよいよ今年度は、この「川崎歴史100年」の完成・発行の年となります。委員の皆さまから忌憚のないご意見をいただきながら、公文書館としてもこの取り組みを着実に進めてまいりたいと考えております。今後ともよろしくお願いいたします。

事務局（堀切）

それでは、事務局からご案内いたします。第9回を迎えまして、この後、会議録を作成させていただきますので、引き続きご協力のほどよろしくお願いいたします。

この後の進行に関しましては、片岡さんからお願いいたします。

（次第一2） 議題の説明

事務局（片岡）

第9回にして、雨の日の開催は初めてです。これまで意外と天候に恵まれ、9回目は雨ですが、そんな雨を跳ねのけ、本日も熱い議論ができればと思いますので、よろしくお願いいたします。

そういたしましたら、事前にもお送りさせていただいておりますが、「記念市史を先読み！」という議題について、本の紙面の内容について議論していければと思います。すでにご覧いただいているかと思いますが、改めて内容について浅井からご説明をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

事務局（浅井）

よろしくお願いいたします。事前にお送りいたしました資料とほぼ類似ですが、お手元の配布資料をご覧ください。

こちらは復習になりますが、市民の意見を取り入れて決定した構成案で、全部で9つのパートに分かれた「川崎歴史100年」の書籍を現在制作中です。

本日は、この中から、No.2、3、4、6の4つのパートの紙面見本をお持ちいたしました。残りのNo.1、5、7、8の紙面見本は、次回の議題とさせていただく予定です。

次ページ以降の紙面見本について、ご覧いただきたいポイントとしましては、対象読者である幅広い世代（特に若者世代・子育て世代）が関心をもって読みやすい文章や表現になっているか、文章の切り口や表現に市民として違和感を感じるころがないか、「もうひと工夫こういう言葉や、表現」にしたらかどうかといったアイデアなどを、本日、ご感想やご意見としていただけると幸いです。

今、片岡が回覧しておりますのは実物大の紙面です。お手元の資料では一回り小さくなっておりますので、サイズ感、写真や文字の大きさについては、順々に回していただきます実物大の見本をご参照ください。前回の紙面見本から、掲載する項目について市民の皆さまからのご意見を取り入れ、また庁内のご意見も取り入れ、作ってきたものになります。デザインに関しても、懇談会で議論をいただいて、ご意見を踏まえたものにさせていただきます。

そのため、本全体のデザインに関わる内容や構成要素、配置されている話題そのものについては、入れ替えが難しい段階に来ている点をご留意いただきつつ、文章や書きぶりについて、本日ご意見をいただき、ブラッシュアップさせていただきたいと思っております。

こちら（投影資料 P7~8）が補足になりまして、お手元の資料にはないですが少し懐かしい目次案です。こちらが先ほどの9つのパートで、「それぞれのパートの中にたくさんのテーマがあった」と思い出して頂ければと存じます。この、川崎市の人物史についても、10名の取材をすることになりました。「市民が考えた！川崎【激狭】テーマ史」や「地図で感じる 歩きたくなる川崎史」の中にも、一つではなく複数のテーマがあり、今回紙面としてお持ちしたのは、そのうちの一つということになります。

こちら（投影資料 P9~18）からが、資料投影用のスクリーンでは色が飛んでいますが、紙面の色としてはお手元の配布資料が正しい色になります。扉ページがあり、こちら（投影資料 P9）が「かわさき定点観測-100years-」の扉ページです。以前に、デザイン見本としてもお見せしていますが、この扉ページをめくりますと、記事として見開きが現れる構成になっております。この見開きは、川崎の行政区（7区のそれぞれのページがあります）から中原区のものを取り上げました。

次が「いつだって、川崎は【川崎テーマ史】」の扉（投影資料 P11）になっております。テーマ史の中には18のテーマがありますが、その中から多摩川のテーマを取り上げています。多摩川のテーマは、一つのテーマで4ページ分のボリュームとなっており、二つの見開きになります。ですので、こちらのタイトルから始まり、もう一度めくって、この緑色の枠が終わるところまでが多摩川の記事になります。

続きまして、「人物史」のページになります。初期の提案時点から、パートのタイトルが「かわさきと共に歩んだ ひとびとの物語」と変わっておりますが、テーマや取り上げ方については変わっておりません。今回はその中から、海苔資料室を通じて川崎の海苔作りを伝えていらっしゃる石渡さまの記事をお持ちいたしました。こちらは、10人のうちの2人が該当しますが、昨年の夏休みに小学生がワークショップの一環として取材した内容から構成された記事になっております。

そして、最後にご覧いただくパートが「地図で感じる 歩きたくなる川崎史」です。こちら（投影資料 P16）は、この紫色の扉をめくりますと、さまざまな歩きたくなるコースが示されますが、本日はその中から遺跡・古墳のテーマを取り上げました。こちらのも一つのテーマごとに4ページで構成されており、最初の見開きでは街を歩いた

めの地図やスポットの紹介があります。次の見開きではテーマによっては深掘りした内容があり、古墳についてはさらに情報がありますので、追加コンテンツの紹介を行っています。この4ページをもって、古墳・遺跡の記事としています。

以上が本日の議題ですので、ぜひさまざまご意見をいただけると幸いです。よろしくお願いいたします。

（次第一３） 紙面見本について意見交換

事務局（片岡）

ありがとうございます。本日、ご覧いただく資料のボリュームが多かったと思いますが、事前にお送りしている内容もありますので、「ここをまず発言したかった」というところがございましたら、今回は挙手制で、名前の五十音順にこだわらず、ご発言いただければと思います。

また、発言する内容の順番も、定点観測、テーマ史、人物史、地図といった順序にこだわる必要はありません。こちら（編集注 会場では、ホワイトボードでは縦軸に「コンテンツの項目」を、横軸に「見て頂きたいポイント」を表として提示した）感じたところを横軸としていますが、幅広い世代が関心を持って読みやすい表現になっているか、文章の切り口や表現は良いか、もうひと工夫できそうな点などについて、ランダムにお話しいただければと思います。私の方でプロットしながら整理していきますので、ぜひご意見を賜れればと思います。

中村委員

これに関しては、もう一度教えていただきたいのですが、対象は誰でしたでしょうか。やはり地名は、漢字の通りに書いてあっても、実際には読み方が結構（ありますよね）。

例えば、「たまがわ」と書いていても、違う読み方をする小学校があります。「玉川（ぎょくせん）」（編集注 中原区内の玉川小学校のこと）などです。

どこまでルビを振るのかという点について、私はこれ（配布資料）を見た瞬間に読めない言葉が多いと感じました。住んでいる人は、恐らく何も考えずに言えるのかもしれないですが、「ぎょくせん」もその通りで、小学校に行ってそれを言ってしまうと恥ずかしい、ということもありますよね。

地名などは、特に冒頭の方で、絶対にルビを振った方が良いのではないかと非常に思いました。例えば、この「地図で感じる 歩きたくなる川崎史」のパートに出てくる「橘樹官衙（たちばなかんが）」も、私は読めません。娘が小学校3年生ですが、

恐らく読めないと思います。でも、対象が大人だったら良いのかなと思いますが、大人の私でも読めなくて、（どうなのかな、と感じました。）でも、この写真の説明のような小さい文字のところについては、さすがにルビを振るには小さすぎるかなと思いますが、もう一回だけ、対象といいますか（対象を意識した上でルビを振った方が良いでしょう。）「歴史」を扱うと読めない文字が多いなと正直思いました。一方で、読みたいのです。正しい読み方を知りたくて、「ぎょくせん」も何回言っても、記憶から消えてしまって、「こうなんだったっけ」といつも思って、小学校の子どもと喋る時は気を付けないと思いました。

それと、（投影資料 P9 の）「-100years」と書いてあるのは、マイナスですね。

事務局（浅井）

マイナスではありません。

事務局（渡部）

ハイフンです。副題としてという意味です。

中村委員

「~」（編集注 チルダ）ということですね。単純にマイナスなのかというのは思っていました。だから、「-100years」と書いてあって、「マイナス 100 年をたどる」という意味なのかと、少し感じていました。

今回いただいている 4 つのテーマそのものの話ではないかもしれませんが、全体を見て、私自身が読めない漢字がたくさんある、という印象を持ちました。

事務局（片岡）

まさに、我々としては読み手に伝えるという観点で、子どもも含めた幅広い世代が関心をもって読みやすい文章や表現という点で、このルビ問題はすごく大きいと感じています。特に地図のあたりは、相当気を使っていかなければならないところですし、「-（ハイフン）」がマイナスに見えた点はかなりクリティカルだと思います。

1 人でもそう感じた方がいたということは、市内全体で考えると、何千人規模になる可能性もあります。そう考えると、この「マイナス」という表現ではなく、この部分を「~」にするとか、そもそも入れないといったことも含めて、検討していかなければならないかと思います。検討すべき事項ですね。

中村委員

「~」をここに残したという感じですね。（「-100years」になっているのは、）私たちの資料（配布資料では P 5）にしかないですね。

事務局（片岡）

そうですね。

中村委員

ただ、私はデザインがすごく見やすく、素敵だと思いました。（でも、）地名が難しいですね。

事務局（片岡）

少し中村さんにご意見を伺いたいのですが、このデザインが良いとおっしゃっていただいた中で、まさにこの（子育て）世代という点もありますので、そうしたときに、「デザインが良いな」と一番感じた部分は、どのようなところでしょうか。

中村委員

恐らく、ページを開いたときに色が変わり、全体として統一されているところだと思います。書体も心地良いです。今、自分がどのページを読んでいるのかが右上に書かれていて分かりやすいので、本当に素敵な市史になっていると嬉しく思いました。

あと、紙質がこれからどうなるのか（を楽しみにしています）。上質紙にすると、せっかくの写真が少し埋もれてしまうことになりますが、それでも色の発色なども含めて心地よいものになるのではと思いました。

事務局（片岡）

なおさらですが、文字の使い方について、「読みたい」という気持ちは高まるのですが、読めないことで生じるわだかまりを、いかにきちんと解消していけるかが重要ですね。

中村委員

モヤモヤはあります。ですので、もし可能でしたら、QRコードで読むと、誰かが音読してくれる（仕組みがあると良いかと思います。）

事務局（渡部）

ちょっとお伺いしたいのですが、地元に住んでいても、地名は読みづらいものがあるのでしょうか。

反町委員

私もずっと地元におりますが、読みづらさでいうと、川崎全体の仕事をしているということもあり、覚えられないです。

「玉川（ぎょくせん）」というのはすごく良い例です。川崎市に関わりの深いある方が、公の場で「ぎょくせん」を「たまがわ」と発言されてしまったことがあり、わざわざしたことがありました。それくらい（覚えられない）です。

ですが、「ぎょくせん」が特殊だと思いますし、ややこしいです。「多摩川（たまがわ）」という表記があるのに、なぜか「二子玉川」などの「玉川（たまがわ）」も両方使われるじゃないですか。しかも、こちらは「玉川（たまがわ）」と書いて「ぎょくせん」と読みますので。

それから、中原区にも「明津（あくつ）」という地名がありますし、「むかいがおか」（高津区向ヶ丘）と「むこうがおか」（向ヶ丘遊園駅）など、私もわけが分からなくなってしまうような地名の読み方がたくさんあります。

中村委員

宮前区には「向丘」（むかおか）もあります。

反町委員

何度やっても、気を付けないと間違えてしまうのです。そのような地名が、うまく正しく書かれて、子どもたちにも（自然と頭に）入ってくるような書き方ができると、非常に良いと思います。

地名に関連してですが、念のため、今、中原区のページを見ていたのですが、どこかに「むさこ」と書いていないかと思いました。

事務局（渡部）

書いていないです。「小杉」です。

反町委員

そうですね。「むさこ」は入っていないですね。それでは大丈夫です。ありがとうございます。

事務局（片岡）

まさにそこは本当に難しいところだと思ってしまして。どこまで読めて、どこまで読めないのかというのは、本当に人の感覚値といいますか、理にかなった説明をするのがなかなか難しいと思います。

そうなりますと、「しっかり全部読めるようにしよう」と考えた場合、全部にルビを振っていく、という話になるのが、恐らく問題解決のための道の一つだと思うのですが、現実的にはなかなか難しいです。

そう考えたときに、逆に川崎市役所で、「読みにくい町名」といった形でまとめたオフィシャルな資料などはあるものでしょうか。

中村委員

社会科の本などでしょうか。

事務局（片岡）

確かに社会科の本などにオフィシャルなものがありますね。

事務局（堀切）

もしかすると（市立小学校の社会科の副読本の）『かわさき』が基準になるのでは
と思います。ちょうど小学校3～6年生を対象としていますので。

事務局（片岡）

確かに、行政として「ここは読めない」と認定されているラインのようなものを、
うまく踏襲して作っていけると、非常に良いのではないかと思います。

そのあたりは、内部でも改めて確認してみた上で、もう一度見ていただいて、「少
しこれは（ルビを）振った方が良い」というものがありましたら、ご意見をいただい
ければと思います。

嶋田委員

地名ではないですが、いわゆる普通の漢字についてです。対象は「小学生も」と、
なっていますよね。そうすると、小学生では習わない漢字が出てきています。

あと、まさに、（いつだって、川崎は【川崎テーマ史】の）多摩川の「砂利」が結
構出てくるのですが、「砂利」は、中学になってから学習するようですね。他にも、
「橋の上」（の漢字）の「橋上駅舎」とか出てきましたが、「橋上（きょうじょう）」
で良いのか？など、私も思ったりしました。

もしかしますと、そういう漢字はルビを振るのか、それとも、平仮名やカタカナで
表記した方が良いのかなと思います。

常用漢字については、常用漢字表がありますので、そのようなものを確認すると、
小学校で習うのか、中学校で習うのか、あるいは習わないのか、というのが分かりま
す。一般の書籍であればそれで良いと思うのですが、今回は学習的な要素が強い
ので、少し気を使っていただけると良いのかと思います。

事務局（片岡）

ちなみに、地名ではなく、常用漢字や通常の漢字のところのルビの問題かと思うの
ですが、制作している段階では小学校何年生以上（といった基準はあるのでしょ
うか。）

事務局（渡部）

明確な基準はないのですが制作している中で、なるべく地名とかは積極的に入れ、
今のお話もありましたので、積極的に入れていく必要があるかと感じています。ど
うしても「大人が読めるか」という基準になってしまっている部分はありますが。小学

生、中学生以上ということに関して、参考にさせていただければと思います。

事務局（片岡）

このルビを振る（読み手の）年代のレベル感については、今後さらに検討が必要ですね。ほかに、いかがでしょうか。

阿久津委員

文字量がちょっと多いなと感じました。（文字が）小さいところが少し気になりますが、個人的には、もう少しだけ削れたら良いのかなと思います。

ただ、デザインはすごく良くて、各ページの色が違うところもそうですし、こういった歴史の本は辞書っぽくなりがちなところを、レイアウトで動きを出している点が、非常に「読ませている」といいますか、楽しく進めていけると感じました。

また、「地図で感じる 歩きたくなる川崎史」のページでは、地図がダウンロードできることや、おすすめ散歩コースといった参加型の要素があって、すごく本の中に入り込めるのではと感じました。出来上がると、このページは特に楽しいのではと思います。

事務局（片岡）

この文字量のお話ですが、文字量を削って読みやすくする選択肢と、級数（きゅうすう）を上げて（編集注 文字サイズを大きくして）今の文字量を維持するといった選択肢など、いろいろあると思います。

仮に、文字量を変えずに級数を上げた場合、「読みたい」という気持ちは上がりそうでしょうか。

阿久津委員

余白がデザイン的に良いと感じているので、余白が減ってくると、逆に読みづらさにつながってしまうと思いますので、ほんの少しだけ言い回しを変える、という工夫（が良いのかなと思います。）

事務局（片岡）

プライオリティとしては、級数を上げるというより、文字量をもう少し削る方が要検討事項でしょうか。

阿久津委員

そうだと良いのかなと思いました。特に、若い世代の人は、長時間ずっと読んでいられないと思います。

文字の大きさに「ここだけ読んでおこう」というものができるとはいいかもしれませんが、例えば、「ここを読んでほしい」「ここ面白いね」というところが分かるように、

アンダーラインを入れるなどすると、ぱっぱっと読んでいけるのではと思います。

事務局（浅井）

読んでいて、ここは文字量が多いと感じられた場所を、具体的に教えていただけますか。

阿久津委員

（いつだって、川崎は【川崎テーマ史】の）多摩川のページは、小さい文字が結構多いなと感じました。それと、この（かわさきと共に歩んだひとびとの物語の）インタビューの部分です。インタビュー自体は面白いのですが、少し（文字が）多いと思いますか、ずっと（文字が）バーッと並んでいる印象があります。

事務局（片岡）

なるほど。例えば、スポーツ紙のように、読んでほしい部分が強調されていて、詳しい情報はまた細かく書いてある（というようなイメージでしょうか。）

阿久津委員

はい。そこから興味が出たら読み進めていく、という流れがあると良いなと思います。

事務局（片岡）

ありがとうございます。では、ほかにいかがでしょうか。

高田委員

写真の下文字は少し小さいかと思いました。文字数を減らすためには、例えば、「地図で感じる 歩きたくなる川崎史」P129 右側「影向寺遺跡」の写真の下に、「影向寺の創建は」とか、「影向寺は」と主語が書かれていますが、主語が「影向寺」であることは分かっているので、「影向寺の」は不要かもしれません。そうしますと、もう少し文字が大きくなって見やすくなるのではと思いました。

また、「幅広い世代が関心をもって読みやすい文章や表現か」という点についてですが、「地図で感じる 歩きたくなる川崎史」P128 に「歩いて楽しい遺跡・古墳教えます」と書いてありますが、「教えます」という言葉が、「教えてあげる」というニュアンスで伝わるかとも。

川崎テーマ史の「多摩川とともに生きる」という表現ですとか、読み手と情報を伝える側と一緒に勉強していこう、というスタンスの方が良いのではないかと思いました。語尾に統一感を持たせても良いのではと感じました。以上です。

事務局（片岡）

ありがとうございます。誰にどういったものを提供するかという点で、本としての

スタンスは、確におっしゃる通り統一していけるとより良いのではと思います。今のお話ですと、どちらかというと、共にこの市史を、冒頭ページから一緒に学んでいる、歩んでいる、というスタンスの方が良さそうですね。ありがとうございます。

ほかに、いかがでしょうか。

鈴木（ひ）委員

まず、最初に見たとき、全体のバランスがとても良いと感じました。

写真と文字のバランスですとか、過去と今の比較、色使いも含めて非常に見やすく、最初に興味を引かれる構成だと思いました。

先ほどのターゲットの話にもつながるのですが、大人が見る分には、十分に楽しめる内容だというのが、まず率直な感想です。

少し話が広がってしまうかもしれませんが、先日、「本を読めなくなった人たち ― コスバとテキストメディアを巡る現在形」という本をたまたま読んだのですが、ものすごく驚きました。子どもといたしますか、若者の活字離れが著しく、今では動画ですら倍速で見る時代です。文章を読むこと自体が、コストパフォーマンスが悪いと感じられてしまっている（という内容でした）。捉え方として、その本の中では、「本を読む人は、美術館に行くような、ごく一部の限られた人の趣味なのではないか」という文章がありました。

果たして、小学生がこの（市史の）内容をどこまで噛み砕いて理解できるのだろうか、と考えてしまいました。写真が多いと必然的に情報量は少なくなるので、これ以上情報を削るというのは、正直厳しいのではないかと、思ったりもしました。ですので、そのあたりは、ある程度の割り切りが必要なのではないかというのが、私の意見です。

できることは何かと考えますと、（かわさきと共に歩んだ ひとびとの物語の）インタビューの部分なのではと思います。インタビューは、どうしても会話形式なので情報量が多くなりますし、例えばオーディブルのような形で、せめて音声で聞けるようにするといった工夫は、あるのかなと思いました。

とにかく、今はなんでも動画、しかもショート動画、長い動画は倍速（で見る）、漫画すらあまり読まない、といったことが書かれていましたので、思っている以上に、そのギャップを覚悟した方が良いのかもしれないです。

事務局（片岡）

確におっしゃるとおりです。その割り切りというのは、逆に伝えるべきところは変に削りすぎず、迎合しすぎずに（することですね）。

鈴木（ひ）委員

そうですね。内容が削られてしまうと本末転倒か、という気もします。

事務局（片岡）

もちろん、ページ全体を通して全世代を意識しながら、これまで作ってきているのですが。その中でも、特に以前お話しした「激狭テーマ史」のようなパートは、小学生にもぜひ読んでもらいたいですし、小学生でも非常に楽しめる場所だと思っています。

そういったパートについては、熱量を持って、例えばオーディブルにしたり、場合によっては超ショート動画でサマリーをまとめてみたり、といった工夫が、よりあると良いなと思っています。

鈴木（ひ）委員

全部をまんべんなく（読む）のは無理そうですね。例えば、最後の古墳のところなどは、明らかに情報量が必要な部分ですので、こういったところは、詳しく載っていた方が良いと思います。

それとは別に、今回あまり細かいところまでは見ていなかったのですが、気になった点が二つあります。

一つ目は（配布資料）P7なのですが、直るかどうか分かりませんが、タイトルの「いつだって川崎」が改行されている点です。「いつだって川崎は」と続きそうに見えるので、一瞬「この改行はどういうことだろう」と引っかかってしまいました。ここは繋げた方が良いのではと思いました。

もう一つは、かなり細かいのですが、（配布資料）P10のオレンジ色の部分の右下にあるイラストが、なにか浮いていると感じました。他のイラストに比べて、テイストがやや違っていて、若干幼稚かと思いました。例えば巻物のようなイラストにするなど、少しテイストを変えた方が良いのではと思いました。

事務局（浅井）

ありがとうございます。

事務局（片岡）

鈴木（勇）さんにも、ご意見をいただいてもよろしいでしょうか。

鈴木（勇）委員

私もお話を伺っていて、気づいた点がいくつか、「なるほど」と思ったところもあるわけですが、先ほどおっしゃった、「一緒に勉強していこう」というスタンスは、もう少し前面に出した方が良いのではという気がしました。もちろん、そういう色彩

は強いと思うのですが、もう少しブラッシュアップしていても良いのではという、気がしました。その辺りのスタンスをもう少し出していくのが良いのでは、というところですよ。

もう一つは、先ほどお話にあった「今の人たちは本を読まない」「(本を読むのは)なかなかハードルが高い」ということは、本当にその通りだと思いました。ですの
で、ショート動画にするとか、オーディブルにするとか、そういった工夫もあっても
良いのですが。もう一つとしては、例えば(ひとびとの物語の)海苔養殖の対談を読
んで、海苔養殖に興味を持った場合に、その先へ進むための「取っかかり」のような
要素があっても良いのでは、という気がしました。

事務局(片岡)

鈴木(勇)さん、ありがとうございます。イメージとしては、この本を読んで、基
本的には本は一人で読むものでありますが、例えばそこ(書かれている場所)に実際
に訪れることができるとか、何かしらの体験にまで落としていける、そのようなブリ
ッジがあると良い、という理解でしょうか。

鈴木(勇)委員

それも一つですね。例えば、(地図で感じる 歩きたくなる川崎史には)古墳巡りが
ありますが、文章と写真で読んでいただいても、「なるほど、今度歩いてみよう」と
なったりするわけですが、例えば古墳を紹介するショート動画などがあると、も
う少し時間を持てるのでは、ということです。

あと、単純にこの辺りについて調べたいと思ったときの「取っかかり」として、参
考文献一覧だったり、何か調べる際の「取っかかり」のようなものがあれば良いので
はと思うのです。

正直、それが具体的に何であるのかまで、にわかに思いつかなかったですが、かな
り絞れるところまで内容は精選されているかと思います。ですので、当然これでさっ
と読んで、「なるほどな」と思うところも必要だと思うのですが、例えば「砂利」
のことについて、もう少し知りたいと思ったときのために、(次につながる)「取っか
かり」が多少あっても良いのでは、という気がしています。以上になります。

事務局(片岡)

ありがとうございます。おっしゃる通り、まさにそうだと思います。

この本は、興味や関心をしっかり持ってもらった上で「知る」というところで、こ
の本で完結するというのもありなのではと思います。ただ、その後、次のステップと
して、より川崎を好きになってもらうという点で考えますと、購買行動と同じで、

AIDMA（アイドマ）のプロセスのように(編集注 注意・興味・欲求・記憶・行動の英語の頭文字を取り、消費者が商品やサービスを購入する際の心理的プロセスを示すモデル)、自分で調べて何かをするというのは確実に必要だと思います。書けるかどうかは分かりませんが、「これはどこに行けば見られる」といった情報や、「続きはウェブで」といった形で、自分で見に行く、調べに行くきっかけになる資料があると良いのかもしれない。確かに、そういった遊んでもらう方法も、ありなのではと思いました。鈴木（勇）さん、ありがとうございます。

落合委員

ぱっと見て、やはり非常に綺麗で良いなと思いました。ありがとうございます。

その上で、気になった点が大きく二つあります。

一つ目は、多摩川の「暴れ川」という記載についてです。ただの暴れ川です、という説明だけではなくて、例えば「等々力」は東京と川崎で同じ地名があったり、「武蔵」という地名自体が、久良（くらき）郡の方も武蔵ですが、武蔵中原とか、東京と寄せたような地名が結構多いというのは、まさに今の多摩川はこういう形ですが、実は昔はもっと違った（流路の）形になっていたため、「武蔵」と言われていたこともあります。そういうことも含めて、歴史に寄せて、多摩川の暴れ川の様子なども触れてくれると良いかと思いました。ここに書いてある「昭和49年の氾濫の時」というのは、私も子どもながらに、家自体が流されたのを、実際に車で近くまで覗きに行った記憶があります。そうした体験も含めて、もう少しリアルな印象が出ると良いと感じました。

もう一つは、例えば古墳や、弟橘樹（おとたちばな）神社の話なども非常に面白いのですが、これですと旅行マップのような要素があって、なぜ橘樹神社や、弟橘媛（おとたちばなひめ）に寄せたような伝説があるのかが、川崎ならではのです。弟橘媛は確か横須賀の方から阿波（千葉）に渡ろうとして、沈んでしまったのに、なぜこんなところに祀られているのか。あるいは、古墳がこんなにいくつもあるというのは、川崎にそれなりの豪族がいたのか。

今の伝説だけではなく、背景があると良いと思いました。それは他のものも含め、例えば、立地条件もあるのですが、武蔵小杉はなぜ元々、急行が止まるかという、交通の要所だったというのが昔からあったからです。まさに歴史の本質的なことが示されていると嬉しいかなと思います。以上です。

事務局（片岡）

ありがとうございます。確かに、歴史だけではなく伝説も含めて考えられると、よ

り面白くなります。

私自身も、先日、千葉の方面に行った時に、「ひこぼし岩」のような場所がありまして、「なぜ、ひこぼしなのか？」と気になっていたのですが、説明はなく、疑問が残ったまま帰った記憶があります。そうした背景の説明があると、より面白いのではと思いました。

一点、今おっしゃられた「現状はマップのような」について、一番そのように感じられる理由は、情報量が多いからか、それともデザインがきちんとしているからか、どのあたりでしょうか。

落合委員

マップといいますか、やはり古墳が多いのは、それなりの理由があると思います。その辺りは望月さんの方が詳しいと思うのですが。高台ですとか、洪水の影響を受けにくく、古代から住みやすい地域だったなど、そのような理由があると思いますので、そこに一本の筋（解説）を入れてくださると、マップといいますか、旅行ガイドではない形式にすると良いと思います。

事務局（片岡）

ありがとうございます。今のデザインはそのままでありつつも、このような伝説などの背景（を入れると良いということでしょうか）。

落合委員

もう少しプラスに寄せて、「川崎にはこういう理由があるから」というのがあると良いと思いました。

事務局（片岡）

ありがとうございます。大島さん、お願いします。

大島委員

構成はすごく良いなと思っています。写真がそんなに大きくなくても良いのかと想ったりしました。

先ほど、「文章がちょっと多いのではないか」という話もありましたが、私は逆に文章が結構好きなので、もっと読みたいという気持ちもあります。

先ほどの話にもあったように、勉強のヒントのような形で、「もっと学びたい人は、これについての伝説を少し調べてみよう」という一言があるだけでも、元々調べない人が調べてみたい（と思えるきっかけになるのではと思いました）。

写真の大きさや、レイアウトは全然良いのですが、例えば歴史の写真などで、残念ながらここに載せられなかったものを、どこかホームページ等で別に見られるように

するなど、古墳のところでも別のアングルの写真が見られるようにするなど、そうしますと、少し「調べる資料」といいますか、もう一つ（調べるための）何かになるのではと思いました。

今の本を教科書（という位置づけとして、別に）資料集のようなものもあると、また面白いかなと（思います）。

これ自体は全然良いと思います。字も少し小さいかなと思ったのですが、先ほど（印刷された実物を）見たら、なんとかいけそうだなと思いました。以上です。

事務局（片岡）

まさにそうです。先ほどからも（話題に）上がっているオーディブルやショートビデオといったものは、どちらかといいますと、情報をより深く理解してもらったり、知って興味を持ってもらうきっかけになるような要素だと思うのですが、今のお話のように、「興味を持った上で、もっと知りたい人向け」のコンテンツがあると良い、という話でしたら、まさにテレビと同じで、「地上波ではここまで流しますが、その先はオンデマンド配信で見てください」という考え方に近いと思います。よく面白かった芸人さんが全部オンデマに移されると怒ったりしますが、そのような別の切り口の中で、「掲載しきれなかったものはここにある」という形があるのは、すごく良いと思います。

まさに落合さんがおっしゃられたような、伝説などはどこまでいっても面白いと思います。そこは、いろいろな兼ね合いはあると思いますが、ぜひ編集側でご検討いただければと思います。

嶋田委員

（発言して）良いでしょうか？

僕はこれを見ていて、かなりイメージが湧いてきました。今、いろいろな委員のお話を聞きながら、私が知っている小学生や親子などの、誰が読んでくれるか、誰なら気に入ってくれるかな、ということを先ほどから思い描いていました。

「（この本が）好きな子ども、あの子だろうな」、「あの子だったら気に入って、ずっと読んでくれるだろう」ということを思い浮かんだのですが、そう考えると、そういう子ども、つまり興味を持ってくれそうな子どもの親御さんも、やはり非常に知的といえますか、好奇心が強い方が多いと思います。

この本を、子どもが先に手に取るのか、大人が先に手に取るのかは分かりませんが、きっと子どもが好きなものは大人も好きだったり、親も好きだったりして、結果的に一緒に見ながらのコミュニケーションツールのような役割も果たせるのかと思い

ました。見ながら会話が弾んだり、親から子どもに対して、リードするような問いかけの言葉がこの中にありますと、よりコミュニケーションしやすくなるのではないかと思います。

喜んで見てくれる家庭は、子どもが見るでしょうし、子どもが見始めたら親も絶対に見ると思います。好きな親であれば子どもを巻き込むだろうと思いました。

今、文字を読まない、本を読まないっていう話もありましたが、よく小学校などで授業をさせていただいたりするのですが、賢いと言いますか、知的な子どもは大体クラスに一人ぐらいなのです。「これを知っていますか？」と聞くと、手を挙げる子はだいたい一人で、その子は何でも知っているし、食いついてきますし、実際に知っているのです。

きっとそのようなものだろうと思いながら、そのクラスにいる一人の子どもが食いついてもらえれば、それはそれで十分かと思います。30人のクラスで一人なら、3%ではないですか。3%の子どもが食いついてもらえれば、それはそれで成功なのかと思いますが、恐らくそこは食いついてもらえそうな気がしていて、きっとその子どもの親も知的なのだろうと思います。

事務局（片岡）

なるほど。それは面白いと思いました。恐らく、学級文庫などもそうだと思いますが、いわゆるリファラル（紹介）という、当たり前のことではありますが、（クラスの）誰かが読んでいて、「これ面白かったよ」と言ったら、最初は興味のなかった子どもも読むようになる、というのはありますね。

ゲームでも、まさに「（私が興味を持ったのは、）お兄ちゃんがドラクエを遊んでいて」といった話があると思います。すごく良いと思いました。

例えば、3～4人くらいの興味のある子どもが読んで、周りに「これ面白かったからやってみようよ」とか、「一緒に見てみようよ」と声をかける、ということも起きると思います。

ここでもう一工夫できると良いなと思いますが。難しいと思うのですが、仮に、「こんなことがあったら、イメージされているその子が隣の子にお勧めする」ような、そのようなアイデアはありますか。

嶋田委員

例えば、この地図でしたら、地図に掲載されている周りの小学校の子どもたちが見るとすると仮定します。宝探しではないですが、「ここに何があるかな？」といった、そんなものだけでも、もしかすると、子どもには「実際に見に行こう」、「探しに行こ

う」といったこと（行動と体験）に繋がると良いと思いました。

事務局（片岡）

つまり、体験につながるコンテンツでしょうか。

嶋田委員

会話になる(コンテンツがあると良いと思います)。

事務局（片岡）

確かにそうです。

事務局（浅井）

例えば、今、地図のところだと、「お楽しみポイント」を一つずつ書いてあるのですが、そのうちのいくつかが、お楽しみポイントじゃなくて、「行ってみよう」ポイント（があった方が良くと思いますか？）

嶋田委員

行かないと分からない（という内容ですね？）

事務局（浅井）

はい。例えば、神社の社紋など、「屋根の（瓦の端に施された）紋様は何の動物でしょうか？」ですとか、「ここに何個の穴が空いているのでしょうか？」などの投げかけがあれば、見に行きたくなると思います。

事務局（片岡）

小学校の時に日光東照宮へ行ったのですが、東照宮建物に4本の柱があり、一個だけ渦巻きが逆に立てられている柱あったと思います。修学旅行のしおりにそれが書かれていて、凄く探した記憶があります。

嶋田委員

片岡さんの心に刺さるポイントだったのですね。

事務局（片岡）

(心に刺さったのは私)一人だけの話です。

嶋田委員

でも一人でも心に刺されれば良いのではないのでしょうか。

事務局（片岡）

このブリッジは、大人なりに頭をひねり、何が子どもにとって面白いのか、また、それは大人にとっても面白いことかもしれませんので、「体験につながるコンテンツとは何だろうか」というところを、もうひとひねりして（みては）という思いがあります。ありがとうございます。

にしにし家委員

今のところにつなげますと、クイズが良いのではと思いました。（この本を）コミュニケーションツールにするには、みんなで見るにはこの本は少しサイズが小さいと思いました。ですが、一人が出題するクイズの書かれている本として読むにはちょうど良いと思いました。ですので、人に勧めるアイデアとして、「なぞなぞ」やクイズ、その土地にまつわるクイズがあると良いのではと思いました。

事務局（片岡）

確かにクイズも、ただ「〇〇は〇〇ですか」という話だけではなく、「どこどこにあるので見つけてみよう」、「調べてみよう」といった体験型のクイズのイメージに近いのでしょうか？

にしにし家委員

そうですね。（例えば）「その地名の由来はなんでしょう」などですね。

鈴木（ひ）委員

先ほど、嶋田さんの親子のコミュニケーションのきっかけや、クラス内の橋渡しにしても良いのですが、クイズはすごく良いなと思いました。

例えば「多摩川の水源地はどこにあるでしょう？①東京都、②神奈川県、③山梨県」で、「答えは34ページに」のような感じで、クイズ集のようなものを別に切り出してあげれば、それだけでコミュニケーションのきっかけになります。それに「そうなの？」と言って、それを見に行ってもらえることもできるかと思います。「多摩川にアユは何匹いるでしょう？」「実は、いっぱいいる。という（クイズもありです。）

事務局（片岡）

確かにその他に飛ばさず、この市史の中では飛ばし合わせるのは良いです。

にしにし家委員

地名クイズもありかもしれません。

事務局（片岡）

このアイデアは役に立ちますか？

事務局（浅井）

役に立ちます。ありがとうございます。

事務局（片岡）

本当に楽しそうですね。興味が湧きにくいページは絶対にあると思います。小難しいページもあると思うのですが、そのようなところも読むきっかけになるのではと思います。ありがとうございます。

にしにし家委員

まだ（発言して）良いですか？何個かあるのですが、まず「100年」のところは、私も「マイナス100年」と見間違えました。

事務局（浅井）

扉のレイアウトが悪く、本当は後ろにも「-（ハイフン）」があるはずですが、レイアウトの経過で抜け落ちていました。大変申し訳ありません。

にしにし家委員

デザインはすごく良くて、私的には文章の文字の大きさや画像のサイズも、全部がちょうど良かったです。確かに文字が小さいところもありますが、全て読めましたので、ちょうど良かったなと思いました。

あと、色も本当に良くて、特に（配布資料）P3の「いつだって、川崎は【川崎テーマ史】」の左側が黄緑で、途中にグラデーションの場所があり、右側は青で色が増えているところ、（見出しのところの）グラデーションにも意味があり、すごいなと思いました。

それから、ルビの問題はすごく難しいなと感じました。大人的には、たくさん振られていると、「自分は対象じゃないのかな」と思ってしまい、読みたくなる時もあるので、その点も難しいなと思いました。

あと、違和感がないかと気にして読んでみたのですが、少し感じたのが、「かわさきと共に歩んだひとびとの物語」のページです。小学生記者が取材しているのですが、この青文字が恐らく小学生の質問になると思いますが、頭が良いといいますが、「これが小学生の質問なのかな？」と思いました。あと、小学生が取材したなら、小学生の感想が欲しいと思いました。あえて厳しい言い方をしますが、切り口として「小学生が取材した」だけでは（微妙です）。

また、私的には、「教えます」といった表現は、話しかけてきているのかなというぐらいで、特に違和感はなかったです。

そして、「文章の切り口」というお話があったと思うのですが、「〇〇を調べてみよう」と言われて、本に書かれていても、調べたことは人生で一回もないです。むしろ、どちらかといえば、難しい字や、分からないことがあった場合には、すぐ調べると思います。ですので、話題に出てきて「いいな」と思ったのは、「この地には〇〇の伝説がある」といった表現です。そういう書き方であれば、「確かに自分で調べてみようかな」と思うかもしれないと思いました。

事務局（片岡）

つまり、「押し付けられて調べる」というより、知的に、各ページに「調べたくなるだろうな」という要素を置いておいて、気づいたら（読者が）調べている、という形の方が良いでしょうか。

にしにし家委員

「これって何？」と、すぐ親に聞く、ということの方が良いかと思います。「調べましょう」と言われると調べたくなる、というのはありますよね。

事務局（片岡）

確かに、そういうのも大事ですね。

ですので、クイズ形式で見せていくものもあれば、一部にはそういった「隠された動線」のようなものをしっかり作っておいて見せる、というところなのかと思いました。ありがとうございます。

ちなみに、ルビの使い方のところですが、これまでのご経験の中で、ルビが多すぎて「これは自分向けじゃないな」と感じたことはありましたでしょうか。

にしにし家委員

特に公的なものや地域的なものになると、全年齢が読めるよう、子ども向けにしているのだな、という印象があります。平仮名が多かったりすると、途中で飛ばしてしまうといいますか、飛ばしたくなる気分になることはあります。

事務局（片岡）

そういうことですね。難しいです。

にしにし家委員

そうですね。

事務局（片岡）

そうなりますと、どこまでできるか分かりませんが、振り仮名に関しては全部共通になるかもしれないですが、やはりページにより、多少の粒度の違いなどを考えていくしかないです。ありがとうございます。そのほか、いかがでしょうか。望月さん、お願いします。

望月委員

ルビで言いますと、博物館のキャプションなどは、小学校高学年（の児童）が読めるか読めないかというところを基準にルビを振っています。初出の部分だけ振る、というような形式にしています。単純に、例えば「源 頼朝」であれば、「みなもとのよりとも」はルビを振る、という形式になります。地名や人名については、なるべくル

びを振るようにしています。恐らく、どこでも大体同じような考え方かと思います。

先ほど出ていたクイズのようなものは、確かにあると面白いと思います。博物館での展示では、子ども向けにワークシートを配って、展示を見ながら「何か発見してみよう」という形式で使ってもらっています。そういうものに近い仕掛けがあると、子どもが興味を持って調べたり、自分で答えを探したり、そのような行動につながるのではないかと思います。

全体的な話になりますが、私も写真の大きさと文字量については、大体このような感じかと思いました。

ただ、この（手元にある実寸大の資料）P36の緑色の部分、配布資料でいうとP8になりますが、ここは印刷の関係で緑が網点になっているのか、ここに黒文字が入ると、目が弱いため（文字が）全く見えません。このサンプルでもかなり見えなくなっています。もし、ベタ（塗り）にするのであれば、ベタにした方が読みやすいのではないかと思います。ここだけ網点になっているため、気になりました。

また、どうしても専門的な目線で見えてしまうのですが、ここに書かれている内容は、最終的にどなたかがチェックをされるということでしょうか。ルビの表記が違っていたり、（この本には）多摩川の水源地が甲府市になっていますが、これは甲州市の間違いではないかと思いました。（それ以外にも）いろいろあるので、最後の古墳のところも、最初の見出しの部分で、「橘樹郡」と書かれている一方、千年伊勢山台の方は「橘樹郡家」になっていたりしますので、このあたりも統一する必要があると感じました。縄文時代に関する記載も「早期」ですとか「前半」など、何か微妙な年代感が出ているので、この辺りはもう少し分かりやすく（記載する必要があります）。

もう一つ、一番最後の「横穴墓はこんな構造です」という図があるのですが、これは高塚古墳の「横穴式石室」の図になってしまうので、横穴墓の図としては少し違ってくると思います。横穴墓は台地の脇を掘って作られるものなので、これは高塚古墳の「横穴式石室」の図ですので、差し替えた方が良いでしょう。

細かいところが気になってしまい申し訳ないのですが、一番気になったのは緑色の網目のところです。

事務局（渡部）

ありがとうございます。

事務局（片岡）

そうですね。そのあたりはしっかりとチェックしてまいります。他にいかがでしょうか。

大城委員

皆さんのお話、とても面白かったです。私自身、とても勉強になりました。

私が思ったのは、私は小学生のころから街探検が大好きで、最初に（編集懇談会で自己紹介として）お話ししましたが。あと、私は、（本の）隅々まで読む小学生だったと思います。そういう視点で見ると、例えば「多摩川とともに生きる」のグラフが小さいのが気になりました。せっかく「知りたい」と思った子が見るには、小さすぎるのではないかと思います。資料として出しているものは少し大きめの図にしても良いのではないかと思います。

それと、地図目線でいいますと、（かわさき定点観測の）中原区のページに、中原区のポンチ絵（簡単な地図）があり、そのポンチ絵に星印がついていますが、ほとんど意味をなしていないかと思います。

高田委員

確かにこれは場所の特定が難しいかなと思いました。

大城委員

中原区の地図というのは見ることもないです。地図の北側の辺りに（星印で）示されても、「これは結局どこなのだろう？」と思ってしまいます。ですので、この表示はいらないのではと感じました。

あと、時代が変わっていく矢印に時計の表現がありますが、これもいっぱい表現があるとうるさく感じると思いました。矢印と時計は同じ意味なのかな、とも感じます。全部のページが、例えば幸区や、中原区も同じ表現になると、少しうるさく感じてしまうかもしれません。

皆様のご意見は、本当に私も納得しかありません。クイズがあつたりしますと、実際に行ってみたくになります。

一点、質問ですが、最後の「地図で感じる、歩きたくなる川崎市」について、これは何パターンくらいあるのでしょうか。

事務局（浅井）

こちらは7パターンあります。

大城委員

結構ありますね。こちらは何分ぐらい歩く想定なのかなと思いながら、なにか「旅行マップやガイドマップではなくて」といった話はあったのですが。

事務局（浅井）

滞在時間がありますので、記載している時間を足していただくと、合計の時間が分

かるようになります。

大城委員

分かりました。ありがとうございます。

事務局（渡部）

企画によっては、もう少し短いコースもありますので、巡れるスポットの数により、コースの所要時間に大小が出てきます。

大城委員

地図のスケールがないのですね。この距離感がどのくらいなのか分かりません。

事務局（浅井）

スケールを設けている地図もあります。

大城委員

全体の表現は非常に良かったと思います。

事務局（片岡）

ありがとうございます。どちらかといいますと、細かいデザインのところはさらにブラッシュアップして、より直感的に見やすいということを意識していければと思います。ありがとうございます。

竹内委員

全体ですごく綺麗で、よくできていると思います。ただ、せっかくですので、それぞれのページのコンテンツのストーリー性を、もう少し強調した方が良いかと感じました。

（配布資料）P8～9の先ほどお話に出ていたように、流路が変わったことが「暴れ川」ということだと思います。このグラフを見ると、（多摩川が）急峻だということを表現していると思います。ただ、そもそも日本の河川は全部急峻なのです。それがグラフで示されている。特に多摩川が暴れ川だというのは、下流に来て急勾配だということが、このグラフからも読み取れると思います。そういったことを少し書いてあげると、「流れ」があり、それに対する理解度が非常に上がるのかと思いました。

右上のこの写真も、たぶん洪水の時のものだろうと推測しますが、一言説明を書いてあげるだけで、「そういうことなんだな」という理解が深まると思います。ですので、このページについては、そういった流れを落とし込んで、もう少し情報のつながりを分かりやすくする工夫があつて良いかと思いました。

同じ意味で言いますと、（配布資料）P9の花火大会ですが、会場は川崎側と東京側の両方あります。北側に公園があつて、椅子がたくさん並んでいたり、観覧席になっ

ていると思うのですが、その一部は川崎市なのです。それを一言書いてあげると、先ほどお話に出ていた「両側に等々力がある」といった内容にもつながってきますので、そのような工夫はした方が良いかと思います。

さらに（配布資料）P 9 について言うと、この花火の写真は綺麗なのですが、これは歴史の本であることを考えると、この写真はもう少し小さくても良いと思います。その分、例えば浮世絵の写真は、もう少し大きくしないと何の絵なのかよく分かりません。それから、右上の「海苔養殖」の写真をもっと大きくしてあげると理解度が上がると思います。そういった工夫はもう少し考えて良いかと思いました。

それから、（配布資料）P 8 で言うと、最後（の作業）というか、これからチェックされると、構成され、直ると思うのですが、左側のこの緑のところに書いてある「あばれ川」は平仮名で書かれている一方で、右上の説明では（「暴れ川」と）漢字になっています。こういった点は、直していただいた方が良いかと思います。

それから、非常に気になる点として、各ページの右下に「町名の由来」があります。これはこれで楽しいコンテンツですが、例えば（配布資料）P 8 で言えば、ここに幸町が出てくると、「なぜここで幸町なのだろう」と思うのです。このページを見た感じでは、ここには「平間」の地名の由来を書いてもらおうと、「ここに出てくる平間は、こういう名前、こういう由来なのか」と分かるので、理解度が全然違ってくると思います。同じことは、（配布資料）P 11 の海苔作りのところに、その（欄外コラム）「町名の由来」に扇町が書かれていますが、扇町は全然違うところなのです。ここで書くなら、やはり殿町の由来を書くと、確か、名主の屋敷があったというのが由来だったと思うのですが、そう書いてあげると、このコンテンツ自体の理解が深くなると思います。

（配布資料）P 11 についてもう一点言うと、こちらのストーリーで言うと、「べか舟」というのがキーワードになっているのですが、真ん中の写真、これはべか舟だと思うのですが、ここにべか舟と書かれていないのです。もちろん分かるのですが、書いてあると親切ですし、小学生の質問が「その大きな船があり、びっくりした」と書かれていますから、その船全体の写真を掲載してあげるといった工夫があって良いかと思いました。

あと（配布資料）P 13 で、街歩きコンテンツですので、こちらでも少し工夫あった方が良くないかと思います。右側の一つにある伊勢山台遺跡は、恐らく橘樹官衙遺跡群の中にあるのだと推測しますが、この遺跡がどこにあるのかが分からないのです。関係性をしっかり書いてあげると分かりやすいかと思います。また、影向寺遺跡は地図

に書かれていません。恐らく「136 ページへ」と書いてあり、後ろを見れば分かるのかと思いますが、せっかくここに地図があるので、影向寺の位置も書いてもらえる
と、分かりやすくなるのではと思いました。

あともう一点加えますと、(配布資料) P 14 の地図ですが、P13 には「お楽しみポイント」と書かれていますが、P14 には書かれていません。せっかくですから、ここも見に行ってもらいたい、という意図があるのでしたら、それぞれに「お楽しみポイント」を入れてもらおうと、より行きたくなるのではないかという気がします。以上になります。

事務局 (片岡)

ありがとうございます。すみません、ボリュームが多くて、一個一個噛み砕いて修正を進めさせてください。福森さん、お願いします。

福森委員

ありがとうございます。そこまで深掘して見ていないのですが、全体的な印象としては、すごく手堅くまとめられている、という印象がありました。良い意味で、手堅いなと思いました。以前に「激狭テーマ史」の印象が強くあったので(編集注 第5回編集懇談会でデザインを確認するため、「激狭テーマ史」の紙面を委員の皆さまに提示した経過があります)、本当に真面目に作られているなと感じましたし、激狭テーマ史は非常に印象的でしたので、あのような方向になっていくのか、と思っていました。

(配布) 資料 P 6 の、今昔の写真の比較ですが、川崎大空襲が4月でしたので、今、中原市民館のギャラリーで、空襲と戦前の展示をしています。他のページにもあるかもしれませんが、比較的、昔の写真といっても戦後のものが多いので、市史として100年というトータルの長い期間なので、戦前の写真もあると良いなと思いました。他のページでは使われているかと思いますが、そういった写真があると、良いなと思いました。

言い方というか、僕だけかもしれないのですが、少し違和感があったのは(配布資料) P 10 の「かわさきと共に歩んだひとびとの物語」のリード文です。「川崎市民の方々」というのは、丁寧すぎるかなと気がします。この冊子の対象としては、川崎市民にインタビューをしているのは前提だと思うのですが、「川崎市民」でなくとも、「活躍する方々」で良いのかという気がしました。確かに、インタビューしたのは小学生記者ということで、「本当に実在する子なのかな」、「本当にこのインタビューしたのか」という気がします。

望月先生ほどではないですが、(配布資料) P 13 の「地図で感じる歩きたくなる川崎史」のページの最後のゴールに「田園都市線元住吉駅」と書いてありますが、東横線であって田園都市線ではないと思ったところがあります。

事務局(浅井)

(表記は間違っていますが、) 地図は東横線になっています。

反町委員

厳密に言うと、現在は東横線と目黒線の二つが走っているため、同列で扱う必要があると思います。ただ、その場合は、両方書かなければいけないです。

事務局(片岡)

場所によって、非常にややこしいです。

反町委員

そうは言いましても、はるかに先にできたのは東横線です。後から目黒線ができました。

阿久津委員

表記として、絶対に目黒線も入れないといけないのですか？

反町委員

いや、案内ではないので、書かなくても良いと思います。アクセスなどを書く場合は、基本的に全部入れなければいけないというのはあったと思います。

嶋田委員

「東急線」と省略して表記したら、どうですか？

反町委員

省略するなら、JR 線(でも具体的な名称)を省略するときもありますよね。

事務局(片岡)

(省略の場合は) シンプルに「元住吉駅」だけで良いのではないのでしょうか。そのあたりの使い方や話の仕方については、今後、詰めていかないとはいけません。ここも詰めていきたいと思います。ありがとうございます。最後に、反町さん、お願いします。

反町委員

まず、間違っているところに気づけるのが、私はすごいと思いました。今見ていたのですが、電車が大好きなのに気づきませんでした。

全体的には、デザインは本当に素晴らしいと思います。その上で、いくつか話題に出ていた点について、まず、ターゲットがどのくらいの層なのか、またその内容につ

いて今一度考えるとといった部分では、最終的にすごいボリュームになると思います。全部のページを、全部の世代、例えば小学校低学年から大人のベテランの方々にまで、最初から最後までみんなに見てもらう内容はすごく難しいと思います。例えば小学校低学年の方について言えば、全体的には難しくて、読みたいと思えないページがあったとしても、心に刺さるページが1ページでも、2ページでもあれば良いと思います。私は子どもの頃もそうでしたが、すごくボリュームのある本でも、自分の好きなページだけを、何度も何度も繰り返し見て、その内容だけを完全にインプットしていたことがありました。だから、逆に言いますと、そういうページは必ず欲しいなと思います。これまでの会議の中で、そういったページもできそうな印象がありましたので、大丈夫なのかなと思いますが、やはり、子どもたちにも刺さるページは必要だと思います。

それから、細かい点になりますが、テキストの話ではないのですが、さきほど話題に出た中原区のページについてです。地図の形の話がありましたが、星印の位置ですね。私は中原区民なのですが、川崎市の形は描けるくらいですが、中原区の形があまりに（頭に）入ってこず、中原区の地図には違和感がありました。

ただ、個人的には、それでも深い意味や、少しマニアックな内容を盛り込んで良いと思っていますので、別にこれを取った方が良いとは言いつもりはないのですが、分かりにくいです。特に星印の位置は本当にピンとこないです。ただ、区のシルエットだけ残して星印の表記だけ取るのもおかしいかなと思ったりしました。

順番に言いますと、多摩川のページについて、先ほど望月さんもおっしゃっていた緑の網点は、私も非常に気になりました。配布資料ですと、そんな気にならないのですが、こちらの実寸資料の方ですと、かなり気になります。目がチカチカしてしまい、第一印象として、読めなくはないですが、良くないかなと思いました。印刷品質の話かもしれませんが、このまま仕上がるとしたら、良くないと思いました。

また、イラストについてですが、このページ（投影資料 P12）の上の方にある消印のデザインはデザイナーさんが市史用にデザインしてくれたものですか？

事務局（渡部）

そうです。

反町委員

なるほど。こういうのは、私は個人的にすごく好きです。それでいうと、もう本当細かくて申し訳ないですが、次のページにイラストが何個か表示されていて、例えば鶴のイラストで、あと下に赤とんぼですね。

高田委員

これは鷺です。

反町委員

ごめんなさい、鷺ですね。鷺、赤とんぼ、これはアユでしょうか。右のページですね。そして花火。花火のページに花火の絵が良いだから、良いのかなと思ったのですが、こういう細かいイラストにも、より深い意味とか整合性があると面白いかと思います。私はそういうのをこだわるのが好きなタイプです。あくまで個人的な意見です。以上です。

事務局（片岡）

ありがとうございます。中原区の形って、パッと出されて、分かる方ぐらいでしょうか。ちなみに川崎市職員の方々は分かるのでしょうか？

事務局（柿木館長）

最初、区役所勤務でしたので、自分が所属していた区の形は分かるかもしれません。私は7年ぐらい勤務していました。

事務局（片岡）

なるほど。区の地図はあっても面白いです。住んでも分からないことが面白いと思い、クイズにしても良いのではと思いました。

ですので、外れるというより、これを通じてより知ってもらおうという観点ですと面白く、知らなくても、より楽しめるよというところと言えるかもしれないです。

嶋田委員

線路があるとなんとなく分かるかと。南武線と東横線があったらなんとなく分かるかと思いました。多分、私も幸区で、電車の線路があったら分かると思います。

高田委員

本の最初に地図はありますか。

事務局（浅井）

扉のページに全体の地図があります。

高田委員

例えば「川崎市観光ガイドブック 川崎日和り」には全体の地図があり、地図番号と場所の説明がリンクしています。そのように載せるのでしたら、区の地図も分かるかもしれません。

事務局（浅井）

全市でポイントを振るのは、アイデアはあったのですが、そうしますと、スポット

の希薄度が明確になってしまいそうです。この辺りには一杯あるのに、その辺りにはあまりないといった。

事務局（片岡）

ここで南北問題が（明白になります）。

事務局（浅井）

ただ、扉のページに各区の地図を載せさせていただきます。

高田委員

後ろの方に地図の QR コードはありますか？

望月委員

（かわさき定点 -100years の）扉の川崎市の地図を分解してみてもはどうでしょうか。この（川崎市の）形が頭に入っていますので、各区の形は頭に入らないので、それぞれ分解すると面白いのではないのでしょうか。

事務局（片岡）

確かに分解してみると、いつもと違う川崎市の形をしているのですね。川崎市の形は、みんなが知っていますか。そこはエンターテインメント的に考えてみても、クイズ形式にしてみたりすると面白いと思います。ありがとうございます。

本日も盛り上がり、本当に貴重なご意見をありがとうございます。

また、これを踏まえていろいろアップデートさせていただきたいと思います。恐らく、これ一回で云々というより、次回は次回で別のテーマが出てくると思います。

そう考えますと、前回の話では「こう言いましたが」、実は「こちらはこうにやったら、より良くなる」という話が、出てくると思います。

ですので、本日の議論については、我々でしっかり議事録にさせていただきます。

皆さまの記憶の片隅に置いていただき、次回、再び議論できればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

この後、共有事項を説明させていただきます。浅井から説明させていただきます。

（次第一４） 進捗報告／ワークショップ説明

（次第一５） 総括／次回案内

事務局（浅井）

本日はありがとうございました。一件のご報告事項と、次回への流れになります。

まず堀切さんよりお願いいたします。

事務局（堀切）

人物取材の進捗についてご報告いたします。以前、昨年 12 月の懇談会で「この 10

名について選ばせていただきました」ということをご報告させていただきました。その後、10名の方に取材の申し込みをしまして、皆さまに応じていただけたところでございます。さらに言いますと、一昨日の4月21日に、里山フォーラム in 麻生の事務局長の石井よし子さまの取材を終えたところでして、10名の取材がこれで完了したところでございます。

この人物取材の件ですが、ちょうど昨年の令和7年4月22日に、ほぼ1年前に、議題として取り扱わせていただきまして、委員の皆さまにご推薦をいただいたところから始まりました。その後庁内でも紆余曲折を経て、人物の選定と取材の申し込み、写真撮影、取材に応じていただき、無事取材を終えることができました。ここでご報告させていただきます。

ひとえには皆さまのご協力があって、1年がかりになりましたがこのコンテンツが実りそうですので、同時にお礼申し上げます。ありがとうございました。

中村委員

ちなみに、先程から思っていたのですが、石渡さんの海苔の記事の取材者は子ども記者だったと思います。それ以外は子ども記者ではないですね？

事務局（堀切）

そうですね。（訂正 子ども記者に同伴して、ライターも同時に取材しています。）

中村委員

その紙面の（文章とかの）ブレは、大丈夫ですか。上だけ子ども取材となっていますよね。

事務局（堀切）

石渡さんと加藤ご住職に関しては、昨年の7月に小学生記者が取材をさせていただきました。今回、掲載させていただいている人々の歴史に関しては、例えば「子ども記者が取材しましたよ」というアイコンと、写真も掲載させていただいているところです。子どもが取材したということも読める要素として、ただ、全体のそのテイストが合わないともずいと思っておりますので、全体のテイストと合わせた形でまとめております。

石渡さんと加藤ご住職も含めライターの方で取材をさせていただいた際は、私も立ち合わせていただき、本当に面白いお話や、人生の話もありますが、その背景にある歴史や文化というものがにじみ出ていまして、この仕事をやっていて非常に良かったと感じた仕事でした。本当にそう思っています。

事務局（浅井）

クエスチョン（質問）のところは、子ども風になっているのですが、お答えになっているところは、特に石渡さんの（発言の）ところでも子ども向けに話した風には入っていないので、他のところと同じようにします。

中村委員

全部子ども向けではなく編集しても良いのかなとは思ったのですが。でも、バランスが取れていれば、大丈夫かと思います。

事務局（浅井）

ありがとうございます。こちらがこの後の施策になりまして、前回のこの場でも少し頭出しさせていただいたのですが、今年もワークショップを開催します。ワークショップのタイトルは、「本の広報プランを作るワークショップ&コンテスト」としております。これまで、ご記憶に新しいところですが、市民アンケートから、こちらの編集懇談会でも、「川崎歴史 100 年」をどう PR していけば良いかというアイデアを様々ないただいていたしまして、このワークショップでは、いただけてきましたアイデアを組み合わせ、さらに具体的なものに昇華させて、プランまで練り上げていただく。それをコンテスト形式で審査することで、より盛り上げようというイベントになります。

全 2 回シリーズのワークショップで、1 回目は、まず、今作ろうとしている本を参加者の皆さんに見ていただき、「こういう推しポイントがあるので、それを市民の方に広めるにはどうしたら良いか、考えていただきたいです」というワークショップを実施します。チーム戦ですので、3～5 人の 8 チームで集まっていただき、2 回目はコンテスト形式で、「私たちのチームは、こういう広報プランを考えました」、「こういう人に、こういう方法で勧めると、きっと心に刺さると思います」というプレゼンテーションをしていただき、それを審査して、グランプリに輝いたプランは、実際に広報施策として実施するということを目指しております。

今度、5 月 1 日の「市政だより」に掲載しつつ、募集を開始します。その後、6 月 1 日まで 1 ヶ月間、参加者を募集いたします。

つきましては、このような取組が今度「市政だより」に掲載されますので、周囲でこのようなことに興味がありそうな方がいましたら、ぜひお伝えいただきたいです。事務局に、「こういうところに、お知らせやチラシを持っていくと参加者が集まるかもしれない」という情報があれば是非いただきたいです。口頭でもメールでもお寄せください。たくさんの方が来てくださり、盛り上がる会にしたいと思っております。

中村委員

川崎の高校などに、教育委員会経由のメールで情報を伝えたら良いと思います。

大島委員

(コンテストの) 本戦を見に行くことはできるのですか。

中村委員

私もそう思いました。

事務局(浅井)

検討します。そこまで要望があるのは思わなかったです。

中村委員

逆に(こちらの編集懇談会の委員として) チームで出ても良いでしょうか。

反町委員

落ちたら、恥ずかしいですから。

事務局(浅井)

現状でも、(委員の皆さまには) 2年間かけて考え過ぎていただいています。

事務局(浅井)

ありがとうございます。早いもので次回が第10回になります。日程としましては、7月1日から10日までの約2週間の水曜日、木曜日、金曜日のいずれかでご予定をお伺いしようと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

今回のテーマは「記念市史を先読み!」の第2弾となりますので、本日議論していただいたものとは違うパートの紙面を事前にお届けいたしますので、引き続きよろしくお願いいたします。「激狭テーマ史」もお届けいたします。それでは、以上になります。

事務局(堀切)

すみません、もう一点追加させてください。今年度ですが、先ほどの市民に広報プランを考えていただくということの一つのテーマなのですが、この本は市民の方からいただいた様々なご意見を反映してきた本ですが、どのように魅力を知っていただくかということが課題だと捉えております。情報発信の手法は、現在、シティプロモーション推進室とも相談しながら、広報プランを立て、計画的に実施していくことも検討しているところです。

その広報の一環で、川崎市のホームページでこのような視覚的、歴史として残る事業に関して映像として、実は残しているものがございます。こちらの懇談会に関しましても、皆さまにアイデアや、ご意見をいただいている場ですので、映像の撮影をど

こかの場面をお願いさせていただくことが出てきそうです。事前にお知らせさせていただくとともに、ご了承いただければと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。以上です。

事務局（片岡）

ありがとうございます。引き続きよろしくお願いいたします。では、本日はどうもありがとうございました。

以上